



日本植物病理学会ニュース 第82号

(2018年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

平成30年度日本植物病理学会大会は、神戸大学・兵庫県での学会員で組織した実行委員会により、3月25日(日)～27日(火)の3日間、神戸市の人工島ポートアイランドにある神戸国際会議場で開催されました。大会初日の総会では、大会委員長ならびに夏秋知英会長の挨拶と議事後、久保康之新会長、柘植尚志新副会長の挨拶、名誉会員・永年会員推挙状の授与、学会賞・学術奨励賞・論文賞の授与、ならびに久保新会長の会長講演(写真1)、3名の学会賞受賞者(近藤則夫氏、桑田茂氏、高松進氏)の受賞講演が行われました。

午後からは、学術奨励賞受賞者(宮下脩平氏、甲把理恵氏、八重樫元氏)の講演に続き、一般講演がスタートしました。初日夕方の情報交換会は、国際会議場に隣接したポートピアホテルに会場を移し、加藤肇名誉会員の乾杯の音頭により盛大に開催されました。「乾杯は日本酒で」という神戸市の条例に従い、神戸大学発の日本酒「神のまにまに」での乾杯でした。

今回のプログラム編成に当たっては、ひとつの新しい試みを行いました。これまで菌類・細菌・ウイルスの各病原体による縦割りで配置されることが多かった演題を感染生理、検出法、新病害などの分野では病原体の種類に関わらず1会場に集めました。たとえば感染生理には、病原体の種類に関わらず共通の現象があるはずで、さまざまな病原体に対する宿主反応の解析を行っている研究者が一堂に会して情報交換・議論することにより、新しいアイデア等が生まれるのではないかと、という発想に基づくものです。この試みの評価については、皆様の忌憚なきご意見を頂ければと思います。

総計で大会895名、情報交換会440名という多数の皆様のご参加を頂き、3月27日、3日間の日程を無事終了致しました。これもひとえに、会長を初めとする学会役員の皆様、座長や学生優秀発表賞の審査員をお引き受け頂いた皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たって頂いた実行委員の方々、そして大会参加者の皆様のご支援・ご協力の賜物と存じます。改めて、厚く御礼申し上げます。(大会委員長 土佐幸雄)

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第2回植物病理を紡ぐ会開催報告

第2回植物病理を紡ぐ会は、植物病理学会大会前日の平成30年3月24日に神戸ポートオアシスで開催された(写真2)。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて4回目となった今回は、大学卒業式の時期にあたり日程的にも厳しいことなどもあり例年のように100名を超えなかったが、大学、公的研究機関、企業(農薬メーカー、種苗会社)から68名の参加者を得て、小規模ながらも活発な質疑応答が行われ、非常に熱のこもった勉強会となった。

これまで植物病理学会のいくつかの部会では、学生・若手会員の研究交流・情報交換・交流を深める場として「若手の会」があり、活況を呈してきた。「植物病理を紡ぐ会」



写真1: 新会長講演

は、そのような場を全国大会の場でも作り、特に学生・若手会員に対して、①「現場から実験室まで」、「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらい、②そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢の広さを知ってもらうこと、さらには③業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流、の3点を目的として、文字通り、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された、植物病理学会若手・中堅有志による自主勉強会である。本会では、植物病理の幅広い分野からの講師を招き、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今の研究・職務へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々がそれぞれ人生の岐路でどんなことを考えて、どんな選択をしてこられて今に至るのか？という、いわゆる研究・職務の裏側に触れる機会というものは、若手・中堅研究者にとっては示唆に富んだ貴重な経験になるのではないかと考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、晝間 敬氏（奈良先端科学技術大学院大学）による「*Colletotrichum* 属菌の研究から見えてきた植物感染糸状菌の感染戦略の可塑性—病原性と共生の境は？」、さらに、藤川貴史氏（農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門）による「植物病理学者としての私のレーズンデートル」という二題の講演をお願いした。「半生史」という簡単ではない依頼に関わらず、まず、晝間氏からは、一昨年、晝間氏が発表された素晴らしい研究成果へと至る過程やその研究を取り巻く情勢、さらにはその後の進展や現在の展望をわかりやすくご紹介いただき、病原菌だけではなく微生物と植物の関わりに関して、多くの質疑応答を含め、参加者一同深く考える機会となった。また、素晴らしい研究成果を出されたからこそその悩みも含めてご紹介いただき、通常の結果発表では知り得ない、研究者の生の声に触れることができる貴重な機会となった。続いて藤川氏からは、国の機関で現場の病害防除に携わっておられる立場から、そこへと至る過程やその過程で考えられたことをご紹介いただいた。特に「現場の植物病理学」でのさまざまな体験を経て、藤川氏ご自身が「植物病理学者として大事なことは何か？」ということは何度も熟考された末に導き出された藤川氏なりの「植物病理学者としての生き様＝レーズンデートル（存在理由）」に関して、概して重くなりがちな話題にも関わらず軽妙な語り口でわかりやすくご紹介いただいた。藤川氏の植物病理に対する哲学は、植物病理の道を歩み始めた学生や若手に「研究者としてのあり方の一例」となっただけでなく、道半ばまでたどり着いた中堅参加者にとってもそれぞ



写真2：参加者一同

れ自分自身の「植物病理学者のはしくれとしてのレーズンデートル」を今一度問い直す機会となった。また藤川氏からは、参加者から参加登録時に挙げられた農研機構での仕事に関する各種質問にも一つ一つ丁寧にお答えいただいた。

また第二回となる今回からは、植物病理学研究において重要となりうる生物学の最新技術に関する内容を技術セミナーという形で企画することとした。今回は、石橋和大氏（農研機構）の紹介で、地元神戸大から遺伝子編集技術に関して最先端のご研究をされている西田敬二氏にご登壇いただき、「植物ゲノムの塩基編集技術」に関してご紹介いただいた。今後、植物病理分野において基礎研究および現場での病害防除育種のいずれの分野においても植物、微生物を問わずに重要になるであろう遺伝子編集技術に関して、西田氏が開発された TargetAID 技術を中心に説明いただき、新技術の特許化やベンチャー設立に関する内容まで質疑応答でご対応いただいた。

今回はさらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から若手中堅へのメッセージも含めて「半生史」を語っていただきたい、という声に応え、特別ゲストとして奥野哲郎氏（龍谷大学農学部）をお願いし、「ウイルス、カビ、農薬と歩む研究の旅路」と題し、ご講演いただいた。大学、海外、企業、大学と歩んでこられた奥野氏の学生時代からこれまでのご経歴をまさに「半生史」として、若手中堅参加者の知り得ないような「歴史」の話も含めつつ、それぞれの岐路での困難やその解に関してご紹介いただいた。翌日からの大会での学会発表を控えておられるという奥野氏の益々盛んになる「植物病理の研究者魂」を目の当たりにすることができ、考えることや悩むことは多いがとにかく「やってみなきゃわからない」という非常にシンプルではあるが力

強いメッセージを参加者一同、心に刻み込むことができた。

以上のように、限られた時間ではあったが多彩な講演者の半生や新規技術に関する知見を参加者一同共有させていただき、来年度の植物病理学会大会前後での第3回植物病理を紡ぐ会開催をアナウンスしてセミナーを閉会した。本勉強会の目的の一つの異分野交流に関しては、セミナー終了後、場所を移して情報交換会を行い、一次会、二次会、三次会と、活発な意見交換と共に行われた。末筆ではあるが、大会前日にも関わらずお集まりいただいた参加者の方々、また、多忙な時期にも関わらず（しかもボランティアで）お引き受けいただいた講演者の方々に、世話人一同心よりお礼を申し上げる次第である。（別役重之）

(2) 第18回植物病原菌類談話会開催報告

第18回植物病原菌類談話会は、平成30年度日本植物病理学会大会終了後の平成30年3月27日の13:30～17:00、神戸国際会議場 Room 401, 402にて開催された（写真3）。大学、公立の試験研究機関、国立研究開発法人、独立行政法人、植物検疫機関、農薬メーカー、種苗会社及び農業団体などから学生・研究者等188名の参加があった。今回の談話会のコーディネーターは、東京農業大学 国際農業開発学科 本橋慶一氏、神戸大学 大学院農学研究科 中馬いづみ氏（現所属：帯広畜産大学）が務め、「分子系統の基礎から現場での利用まで—（小さな声でいいますけど）その使い方は間違っています—」というテーマの下、3題の講演が行われた。演者およびその講演題目は、瀬戸陽介氏（首都大学東京 理工学研究科 生命科学専攻）「MEGAを用いた分子系統樹作成の基礎と応用」、野澤俊介氏（玉川大学 農学研究科 資源生物学専攻博士課程後期）「現在の広義 *Pestalotiopsis* 属菌の分類による種同定の限界」、草場基章氏（佐賀大学 農学部 応用生物科学科）「植物病害診断における分子データの活用法—分子データとハサミは使いよう!？」であった。瀬戸氏の講演では、主に病原菌の同定によく使われる分子系統樹の作成時に選ぶべきモデルの原理や、正しい方法で系統樹を作成すると、独立するよう見えていた OTU が独立しなくなる例など、ありがちな間違いが具体的に解説された。野澤氏の講演では、近年3属に分かれた広義 *Pestalotiopsis* 属を例に、種の同定方法について説明され、分子系統解析と形態解析によっても現状では既存種とも新種とも判断できず、sp.として留めざるを得ない具体例が解説された。さらに、草場氏の講演で、現場で薬剤耐性菌や強病原性菌の識別によく使用される RFLP の結果の解釈や、遺伝子を使用した診断技術の構築で陥りやすい失敗例などが紹介された。



写真3：講演の様子

その後、話題提供として青木孝之氏（農業・食品産業技術総合研究機構遺伝資源センター）によって「新しい国際藻類・菌類・植物命名規約（ICNafp; 深圳規約 2018）の改正点について～菌類学名は予定どおり統合されます」というタイトルで、2017年に開催された第19回国際植物科学会議の命名規約セッションの概要と規約の改正点が報告された。特に学名の優先権や保護名などの説明のほか、「菌類として扱われる生物のみ」に関係する条文については、規約編集委員会により後日選別され、他の規約条文と分離されて別の章「Chapter F」としてまとめられること、その章の改正については国際植物科学会議の命名規約セッションではなく、国際菌学会議の命名規約セッションにて決定されることが説明され、今年行われる IMC11（プエルトリコ）での会議動向に関心が向けられた。

今回の談話会は終了予定時刻から総合討論が始まることとなってしまったが、それでも多くの参加者が会場に残ってくださった。総合討論では、質問が続き講演内容の理解を深めるとともに、現状の問題点も共有できたと考えている。本談話会の開催準備の段階から多大なご支援をいただいた神戸大学の大会事務局の方々に深く感謝いたします。来年度も植物病理学会大会にあわせて本談話会の開催を予定しています。（渡辺京子）

(3) 第28回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム報告

第28回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、平成30年3月28日に神戸大学（神戸市）で開催された。公的研究機関、大学、農薬メーカーおよび農業団体などから162名の参加があった（写真4）。

はじめに、内橋嘉一氏（兵庫県立農林水産技術総合セン

ター) から兵庫県における水稲病害の殺菌剤耐性菌の発生経過と対応状況について紹介して頂いた。同県では、QoI 剤耐性のいもち病菌を 2013 年に確認したが、発生様相が地域間で大きく異なっていたことから、その要因を詳細に検討した結果、一部地域の採種圃種子に耐性菌が混入した可能性が示唆された。種子伝染性病害は、耐性菌に細心の注意が必要であるが、主要農産物種子法が今年 3 月に廃止されたことから、同県では独自に条例を制定して関係機関の連携に努めていることが紹介された。次に、農林水産省消費・安全局植物防疫課の白石正美氏から、国内の薬剤抵抗性病害虫の発生状況と今後の対応について講演頂いた。2011 年から 2013 年、2016 年に全都道府県に行ったアンケート調査から、薬剤抵抗性対策に関する関心が全体に高まってきており、今後はモニタリング体制の整備等に対して支援する予定であることを紹介して頂いた。また、今回のシンポジウムでは、農林水産省動物医薬品検査所の内山万利子氏から、動物用抗菌剤の薬剤耐性対策について紹介して頂いた。動物用抗菌剤は、家畜や養殖水産動物の安定生産を図る上で必要である。一方で、抗菌剤を使用することによって薬剤耐性菌に係るリスクが常に存在し、これらのヒト医療への影響が非常に懸念されている。このため、関係機関が領域横断的に連携して動向調査、監視の強化・充実を図っており、植物防疫の分野でも今後のリスク管理体制の充実を図る上で大変参考になった。

新規殺菌剤の関係では、山下真生氏(日本農薬株式会社)からピラジフルミド(パレード®)の作用特性と感受性検定方法について紹介して頂いた。本剤の作用機構は、コハク酸脱水素酵素阻害(SDHI)であるが、SDHI 剤感受性低下菌の一部のグループには防除効果が認められること、既存の同系統剤と同様に耐性菌管理が必要であることを解説して頂いた。

後半は、近年問題となっている病害について 3 名の方に講演して頂いた。はじめに、菖蒲信一郎氏(佐賀県農業試験研究センター)から、一昨年に大きな被害をもたらしたタマネギべと病の被害拡大要因と防除対策の取り組みについて講演頂き、主力剤の 1 つであったメタラキシル(M)に対する感受性低下が広域に発生していること、作型別に重点防除時期を設定してマンゼブ剤を主体とした防除プログラムを推進していることを紹介して頂いた。次に、広島県立総合技術研究所農業技術センターの松浦昌平氏から、近年、QoI 剤に対する感受性低下が懸念されているキク白さび病について講演して頂いた。国内では、大分県で初めて感受性低下が確認されたが、広島県でも培地検定およびリーフディスク試験により QoI 剤に対する感受性が低下



写真 4 : 会場の様子

していることが示唆された。うどんこ病など多くの植物病原菌の QoI 剤耐性菌は、ミトコンドリア DNA のチトクロム *b* 遺伝子の塩基配列に変異が確認されるが、キク白さび病菌の QoI 剤感受性低下株には、変異は確認されなかったことから今後の解明が期待される。また、昨年度のシンポジウムに引き続いて DMI 剤耐性リンゴ黒星病について取り上げ、平山和幸氏(青森県産業技術センターりんご研究所)に対応状況を紹介頂いた。同県のリンゴ産地では、昨年度に DMI 剤の使用を県下で全面的に中止し、代替薬剤の使用とそれに伴う防除間隔の見直し、リンゴ芽出し期の特別散布、耕種的防除の積極的推進による「non-DMI 体系」に取り組んだ。その結果、本体系により黒星病の一時伝染時期の発病を顕著に抑制でき、その有効性が確認されたが、二次伝染時期には発病が増加したため、薬剤防除だけでなく前年の被害落葉処理等の耕種対策が重要であるとのことであった。また、リンゴ黒星病菌の QoI 剤耐性菌が国内で初めて確認され、今後の動向について DMI 剤耐性菌とともに注意が必要であることを報告頂いた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、講演者および参加者の皆様に改めて厚くお礼申し上げる。なお、次回のシンポジウムは平成 31 年 3 月 21 日に東京都内で開催予定であり、引き続き皆様の積極的な参加をお願いしたい。

(渡辺秀樹)

(4) 第 15 回バイオコントロール研究会報告

第 15 回バイオコントロール研究会は、平成 30 年 3 月 28 日(水)に神戸大学農学部 B 棟 101 で約 90 名の参加を得て開催された(写真 5)。今回は、「微生物農薬開発戦略のイノベーションと微生物群集構造等に着眼した生物的防



写真5：講演の様子

除研究の動向」をテーマとして企画された。基調講演では、相野公孝会長から、社会実装を目指した微生物農薬の開発戦略について話題提供して頂いた。続いて講演会は二部に分けた構成を取っており、第一部では「国内外の企業における微生物農薬の開発戦略」というテーマで、和田哲夫氏より「日本生物防除協議会と生物防除剤開発について」と題して国内外の微生物農薬開発の動向と課題について紹介して頂いた。次に、海外での微生物農薬開発状況の話題提供として、高木忍氏に「Current and emerging technologies in biopesticide development in the USA」、畠中英次氏に「海外での生物農薬市場動向」という演題で報告して頂いた。第二部では「微生物群集構造等に着眼した生物的防除研究の動向」というテーマで、野本康二氏より「ヒト腸内フローラの変化：ヒトの健康や疾病における colonization resistance の関与」と題して詳細な研究が進んでいる腸内フローラ研究からの微生物群集構造解析事例を紹介して頂いた。これに続いて、廣岡裕吏氏から「雄花だけを枯らす病原菌でスギ花粉症対策の技術を開発」、西岡友樹氏から「ネギ類栽培土壌のフザリウム病抑止性の機構解明」について報告して頂いた。さらに、安藤杉尋氏からは「有機栽培培土の微生物コミュニティを利用したイネもみ枯細菌病の生物的防除」、大野勝也氏からは「菌の脂肪酸代謝物 (BMFA) による病害防除効果とそのメカニズム」という演題で報告して頂いた。第1部および第2部のいずれも、各演者の報告に対して活発な質疑応答が行われ、これらを通じて今後の微生物農薬の開発を効率的に進めていく上でのヒントや留意点等が数多く得られたものとする。なお、本研究会の講演要旨集 (2000 円) および第1~12巻を収録したCD (3000 円) を希望の方は、吉田重信氏 (農研機構中央農業研究センター) までご連絡頂きたい。(池田健一)

(5) 第13回植物ウイルス病研究会報告

第13回植物ウイルス病研究会は、平成30年度植物病理学会大会終了翌日の平成30年3月28日の9:00~16:00に、晴天と満開の桜に恵まれる中、神戸大学六甲台キャンパス内の滝川記念学術交流会館で約100名の参加を得て開催された(写真6, 写真7)。今回は、特に統一テーマを掲げず、果樹ウイルス、ウイルスの生態および基礎ウイルス学の各分野から合計10名の講師の方々に最新の研究動向を紹介して頂いた。

午前中、まず果樹ウイルスとして磯貝雅道博士(岩手大)から「ラズベリー黄化ウイルスの花粉伝染」という演題で花粉伝染性植物ウイルスの水平伝染と垂直伝染のメカニズム研究が紹介された。つぎに伊藤隆男博士(農研機構果茶研)から「ブドウとカキから新たに検出されたウイルス・ウイロイド」という演題で次世代シーケンサー(NGS)を用いた多様なウイルス・ウイロイドの混合感染の検出例が紹介された。さらに鍵和田聡博士(法政大)から「ウメ輪紋ウイルスの宿主範囲と伝染リスク」という演題で本ウイルス日本分離株2系統の木本・草本植物における宿主範囲の検定および種苗類による伝搬やアブラムシによる伝染のリスク管理が紹介された。

続いてウイルスの生態について奥田充博士(農研機構中央農研)から「イネ縞葉枯ウイルスの多発要因の解明と新たな防除対策への取り組み」という演題で本ウイルスの生活環に関する最新の知見および本病による被害抑制のための媒介虫防除等の新たな取り組みが紹介された。つぎに久保田健嗣博士(農研機構中央農研)から「青しその生産地におけるシソモザイクウイルスと媒介虫シソサビダニの発生生態」という演題で病原のエマラウイルスと媒介虫のサビダニの生物学的知見や産地におけるそれらの発生生態の解明、診断技術や防除技術が紹介された。とくに講演中に対象のシソサビダニの巨大模型を全聴衆が回覧できたのは印象深かった。

午後には、基礎ウイルス学分野として中原健二博士(北海道大)から「ダイズ栽培化で選抜されたかもしれないクロバ葉脈黄化ウイルス抵抗性について」という演題で栽培ダイズが示す本ウイルスに対する種特異的な抵抗性の作動ステップの解明と遺伝子単離に向けた取り組みが紹介された。つぎに小林括平博士(愛媛大)から「トランスジェニックモデル植物を用いた植物ウイルス病発症機構の解析」という演題でウイルス病発現機構の代表例の紹介および誘導発現系を用いたモデル植物実験系が解説された。さらに兵頭究博士(岡山大)から「植物RNAウイルスの複製機構」という演題でダイアンソウイルスが宿主植物の



写真 6：会場の様子



写真 7：質疑応答の様子

活性酸素種産生機構をハイジャックし複製に利用していることが提唱された。

続いて再びウイルスの生態について吉田直人氏（ホクレン農総研）から「テンサイ黄化病とニンジン黄化病に關与するウイルスの生物学的・遺伝的特性」という演題でテンサイやニンジンに黄化病を引き起こす多様なポレロウイルスの分子系統解析が報告された。最後に関根健太郎博士（琉球大）から「ポストゲノム時代の病原ウイルス探索の現状と課題」という演題でNGS法等によってウイルスを網羅的に検出することが容易になった反面、そのウイルスを病原体として証明することには様々な困難・課題があることが紹介された。

佐野輝男博士（弘前大）には果樹ウイルス、眞岡哲夫博士（農研機構北農研）と大島一里博士（佐賀大）にはそれぞれウイルス生態分野の午前の部と午後の部の座長を担当

して頂いた。基礎ウイルス学分野の座長は三瀬和之（京都大）が担当した。

講演者の皆様には大会の一般講演とは異なり、研究背景なども十分に説明して頂き、内容を理解しやすく感じられた。また、座長の皆様には、活発な質疑応答を先導して頂き、予定時間を超えるほどの盛り上がりも見られた。

最後に、講演者、座長の皆様、神戸大学までお越し頂いた聴衆の皆様、本会の運営に携わった岡山大学資源生物学研究所・植物／微生物相互作用グループと京都大学植物病理学研究室の諸氏、および神戸大学の土佐幸雄博士、中屋敷均博士および池田健一博士に感謝申し上げます。

（三瀬和之・鈴木信弘）

（6）技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナー報告

平成30年度技術士（農業部門・植物保護）試験対策セミナーは、日本植物病理学会大会（神戸国際会議場）の会場にて、第2日目（3月26日）に、当学会技術士対応委員会主催のもと開催された。本セミナーの準備と開催に当たっては、大会委員長をはじめとする大会運営委員会の皆様に特段のご配慮をいただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。

今年度もセミナーは第一部（第一次試験対策）、第二部（第二次試験対策）の二部制とした。第一部は昨年度同様ランチセミナーとして開催した。技術士制度と本会の取り組み等について紹介がなされた後、前島健作氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）が技術士制度概要と第一次試験（農業部門）の概略と受験申込みの手順などについて説明した。次いで新合格者の二條貴通氏（東京大学大学院農学生命科学研究科）より、第一次試験合格体験として受験の動機、勉強法、当日の心掛け等の話を伺った。最後に、二條氏に加え東條元昭氏（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科）、大上大輔氏（ホクレン農業協同組合連合会）を加え、大上氏の司会で質疑応答・ディスカッションを行った。受験のきっかけ、受験勉強の取り組み方のほか、若いころには正解できたであろう基礎科目の物理や数学の問題に、年を経た今どのように解答するのか、といった具体的な質問も出され、活発な議論が行われた。第二部では、技術士二次試験合格者数等の現況等の説明の後、鎌和田聡氏（法政大学生命科学部）より第二次試験の概略と受験申込みの手順等について解説があった。続いて、関係される講演との兼ね合いで、先に総合討論をご担当いただく堀田治邦氏（北海道立総合研究機構 農業研究本部 中央農業試験場）に自身の二次試験対策を話していただき、その後に東條氏の第2次試験対策のポイントと心得へと進行した。合格・筆記試験・口頭試験のポイントの解説、さらに本年

度二次試験予想をいただいた。最後に堀田氏、東條氏に栢森美如氏（北海道立総合研究機構 十勝農業試験場）、長谷部元宏氏（日本農業株式会社）、山内智史（農研機構 中央農業研究センター）を加え、栢森氏の司会で、技術士試験・技術士制度について総合討論を行った。具体的な受験に関する質問だけでなく、技術士制度の活用に関する内容まで幅広い質疑応答が行われた。農業部門・植物保護科目で技術士資格を取得する意義についても真剣な議論がなされ、各所属機関で受けられる報奨や、JICAなどが取り決める特典、さらには日本植物医科学協会が資格取得者を対象に試験・認定する「植物医師」制度などが紹介され、今後も資格活用に積極的に取り組むことが話された。最後に平成31年度に予定される試験制度の見直しや技術部門・選択科目見直し等について簡単な説明が行われ、盛況のうちにセミナーを終了した。なお、本セミナーで配布した資料を、これまでに開催したセミナーの資料とともに会員限定で配布している。日本植物病理学会のホームページの「技術士」の項を参照しお申込みいただきたい。

本セミナーは7年連続、第8回目の開催で、参加者は企業、大学、試験研究機関等から61名の賑わいであった。本セミナーを受講した方が技術士試験に合格し、本セミナーで講演いただくといった好循環を今後も続けていきたい。また、総合討論では技術士試験に挑戦し資格を取得することのメリットの一つとして合格者間での親密なコミュニケーションが挙げられたが、今後も一体となって受験促進と資格活用に取り組まなければならない。末筆となったが、参加者並びに講演者に対し、主催者一同心よりお礼を申し上げる次第である。（濱本 宏）

3. 技術士対応委員会

平成29年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）で9名が合格

平成30年3月9日に平成29年度技術士第二次試験（農業部門・植物保護）の合格者が発表されました。次の9名の方が合格されました（敬称略・ご所属は本年3月時点のもの）。

大平 誠（北海道石狩振興局産業振興部石狩農業改良普及センター）、堀田 治邦（北海道立総合研究機構農業研究本部中央農業試験場；本会会員）、小川 孝行（日本肥糧株式会社；本会会員）、武長 いづみ（茨城県病害虫防除所）、山内 智史（農研機構中央農業研究センター；本会会員）、東條 元昭（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科；本会会員）、長谷部 元宏（日本農業株式会社；本会会員）、羽田 厚（岩手県南広域振興局農政部花巻農林振興センター）、浜崎 健司（岐阜県病害虫防除所；本会会員）

今回の合格者を合わせ、技術士第二次試験（農業部門・植物保護）合格者は計122名となりました。引き続き、試験研究機関や民間企業、大学など、多様な組織から多くの方の受験をお願いします。平成30年度の技術士第一次試験は平成30年10月7日（日）に行われます。また、技術士第二次試験の筆記試験は平成30年7月16日（月・祝）に行われます。詳細は日本技術士会のホームページの試験・登録情報から、試験の実施案内をご確認ください。平成30年度も多くの技術士（農業部門・植物保護）の誕生を期待しています。

【学会活動予定】

1. 部会

(1) 北海道部会

日程：平成30年10月18日（木）～19日（金）
場所：北海道大学（札幌市）

(2) 東北部会

日程：平成30年9月27日（木）～28日（金）
場所：山形テルサ（山形市）

(3) 関東部会

日程：平成30年9月27日（木）～28日（金）
場所：東京大学弥生講堂（文京区）

(4) 関西部会

日程：平成30年9月27日（木）～28日（金）
場所：山口大学吉田キャンパス（山口市）

(5) 九州部会

日程：平成30年11月7日（水）
場所：宮崎市民プラザ（宮崎市）

2. 談話会・研究会等

(1) 第53回植物感染生理談話会

日程：平成30年8月21日（火）～23日（木）
場所：高知大学農林海洋科学部（南国市）

(2) 第28回植物細菌病談話会

日程：平成30年8月23日（木）～24日（金）
場所：高知大学農林海洋科学部（南国市）

(3) 第14回植物病害診断教育プログラム

日程：平成30年8月27日（月）～8月31日（金）
場所：北海道大学・北海道農業研究センター（札幌市）

(4) EBC研究会ワークショップ2018（第14回）

日程：平成30年9月19日（水）
場所：東京大学農学部（文京区）

(5) 第12回植物病害診断研究会

日程：平成30年11月6日（火）

場所：宮崎市民プラザ（宮崎市）

(6) 第29回土壌伝染病談話会

日程：平成30年10月17日（水）

場所：北海道大学農学部（札幌市）

【書評】

堀江博道 編著「増補改訂版 カラー図説 植物病原菌の見分け方」(植物医科学叢書 No. 5) (上下巻, 函入り)

504 ページ (うちカラー口絵 123 ページ) / 2018 年 3 月 31 日初版発行

大誠社 ISBN 978-4-86518-074-9

本体価格 16,667 円 + 税



植物病原菌の見分け方
第Ⅰ編（上巻）の表紙



植物病原菌の見分け方
第Ⅱ編（下巻）の表紙

2014年2月に発行された、堀江博道編著「植物病原菌類の見分け方（上・下巻）」(大誠社)が、4年の歳月を経て「増補改訂版 カラー図説 植物病原菌類の見分け方」として2018年3月末付けで発刊されることとなった。シリーズ「植物医科学叢書」のNo. 5ということになる。誤字脱字の修正だけでなく、増補のほうは1章分（口絵14ページ、本文32ページ）が加えられ、カラー口絵が123ページにも及ぶ。

この本の旧版を最初に手にした時の感想は「今の学生はなんて幸せなんだろう」であった。そもそも法政大学に植物医科学に関する講座が開講されると聞いた時に「大学4年間を通じて専門教育を受けられるなんて羨ましい限りだ」と思いつつも、どうい教材を使うのだろう？堀江さんのことだから、きっと

で何か新しい本の作成に取り組んでいただけるに違いないと期待したところに発行されたのが、旧版の「植物病原菌類の見分け方」であった。さすがは研究・現場指導（診断）の両方で多大な功績を残されている堀江博道氏らしい、研究にも現場指導にも役立つ素晴らしい本を作成して下さった。

まずはカラー写真にウツリさせられる。一人でも多くの学生が、これらの写真を見て微生物の世界に引き込まれてくれることを大いに期待したい。微生物を何だか目に見

えない危ないもの・汚いものと思込んでいる人が多いのは誠に残念なことであるが、微生物に関する先入感を変えてくれそうな写真がズラリと並んでいる。また既に研究を始めている方や現場指導している方にも改めてじっくり見て頂きたい。特に、虫害や生理障害といった微生物以外が原因の異常症状についても豊富なカラー写真が載せられているので診断に大いに役立つことは保障できる。

次に価格である。税込み18,000円という価格は専門書としては廉価な範囲に入るが、学生にとっては少々（かなり？）購入をためらう金額かもしれない。また、504ページ+ハードカバー&化粧箱入りと言うことでズシリと重たい。しかし、中身の豊富さを知るに及んで認識を一変させられるハズである。よくもこれだけの内容を、この価格に抑えることが出来た、よくもこれだけのページ数に収めたものだと感心することになる。通常、これだけの知見を得るためには、「病害虫診断」「生理障害診断」「微生物（特に菌類）の分類」「PCR等遺伝子操作の実験解説」「顕微鏡の取扱説明」に関する各書籍に加えて、「日本植物病名目録」（日本植物病理学会編）や植物病原菌（体）の接種方法に関する文献と各病原菌（体）の分類に関する論文を「属」ごとに揃えなければならない。実際、私も診断依頼があった時には、上記の書籍・論文を引っ張り出し、机の上に積み上げ片っ端から読むという作業を長年やってきた。特に、新病害として学会発表する時は、過去の知見を十分に調べ尽くさねばならないので、分離・培養・接種試験に加えて文献検索をせねばならず、作業に膨大な時間がかかる。たとえ植物病原菌（体）に興味があったとしても、病害虫だけでなく、生理障害から農薬のトラブルに至るまで、植物の異常に関する現場の多種多様な問題に日夜対応せねばならない都道府県の病害虫防除所・試験場の職員にとっては大変な作業である。必然的に、毎日のように残業+場合によっては土日祝も出勤ということになる。しかし本書があれば、机に積み上げる書籍・論文の数は大幅に減らすことが出来る。この文章の最初に「今の学生はなんて幸せなんだろう」と書いたのは、そういう思いを込めている。

さて、もう少し具体的に内容について触れてみよう。

上巻は、口絵に続いて菌類の所属と形態的特徴が詳述されている。全国農村教育協会（全農教）編「植物病原菌類図説」とソフトサイエンス社編「植物病原アトラス」からの転載により、形態的特徴と分類学的位置が極めて理解しやすくなっているのは勿論であるが、全農教編「日本植物病害大事典」を彷彿させるような端的で無駄の無い表現で、病原菌（体）の生態学的特徴や実際に病害を診断する際に重要となる「症状」が記載されている。また、モノクロで

はあるが、ここにも鮮明な写真が豊富に掲載されており、一層理解が深まる。手取り足取りという表現がふさわしい。

次に下巻は、菌類以外が原因となって生じる各種（細菌病、ウイルス病、線虫病、生理障害等）異常症状についての記載の他、診断の手順から農薬登録制度の概要、そして実際に現場で普及している農薬以外の防除法まで述べられている。いかにも現場での診断とその対応のノウハウを熟知されている堀江さんらしい項目立てである。さらに更に、遺伝子診断法の概略からルーペ、顕微鏡の使い方、果ては新病害の学会発表方法まで、ここまで解説してくれる本は間違いなく初めてである。

加えて、本書を有意義なものにしている項目に「ノート」と題された補足・派生記事がある。初心者の方は、口絵を眺めた後、この「ノート」を一通り読むだけで、植物病理の世界を概観出来るのではないだろうか。

結論を端的に言うなら、本書は、初めて微生物・植物の病気について学ぶ学生に始まって、学会発表を目指す大学院生、現場で指導にあたる農業改良普及員や病害虫防除所職員・農協の技術指導員、樹木医、学生を指導する大学の先生方まで、半端ではない非常に広範囲の方々にとって有用である。正直、植物病理に関する他の書籍が売れなくなってしまうのでは？という心配さえ抱かせる。誉めすぎと思うなら、一度、手にして実物を見て頂きたい。カラー写真の口絵を見ただけでも貴方もきっと買いたくなりますよ。

(2018年3月 静岡県病害虫防除所&樹木医 外側正之)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、鈴木文彦、池田健太郎、平塚和之、山内智史
(新：藤田佳克、大島研郎、鈴木文彦、池田健太郎、染谷信孝)

編集後記

学会ニュース第82号をお届けします。本号は、大会とその後開催された研究会・談話会の報告を中心に掲載

しました。

大会は、春らしくなった3月25日からの3日間、神戸市のポートアイランドにある神戸国際会議場で開催されました。大会には900名近くの参加者があり、プログラム編成の工夫も相まって各会場とも活発な情報交換・議論が行われ、また懇親会も盛大に開催されて成功裡に終了しました。大会委員長の土佐幸雄先生をはじめ神戸大学、兵庫県の大大会実行委員の皆様には大変お世話になりました。開催準備、運営のご尽力に深く感謝したいと思います。

大会のサテライトとして各種の研究会、談話会が開催されました。大会前には植物病理を紡ぐ会が開催され、前身の「若手の会」を引き継ぎ、非常に熱のこもった勉強会となったようです。大会後には植物病原菌類談話会、殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム、バイオコントロール研究会、植物ウイルス病研究会が開催されました。多くは200名近くといずれの会も多数の参加者があり、興味深い講演、それを受けての活発な質疑が行われています。研究会・談話会を運営されました幹事の皆様、ご講演の皆さまに感謝申し上げます。活発な学会活動が続いており、喜ばしく思います。

本年も大会中に技術士試験対策セミナーが開催されました。61名の参加者があり、先輩の技術士や新合格者の貴重な経験談やアドバイスに対して技術士制度の活用まで踏み込んだ幅広い質疑応答や真剣な議論が行われたようです。なお、農業部門・植物保護の技術士に新たに9名の方が合格し、合格者は延べ122名になったとのこと。技術士皆さまの益々のご活躍と今後も多くの技術士合格を期待します。

今後の学会活動予定として、今年度の各地域の部会や年内に開催予定の研究会・談話会の開催日程と場所を掲載しました。多くの皆様のご参加をお願いします。

今年3月に刊行された堀江博道氏編著の「増補改訂版 カラー図説 植物病原菌の見分け方」を静岡県の外側正之氏にご紹介いただきました。4年前に出版された書の改訂増補版ですが、カラー写真や解説が大幅に補足されて内容がさらに充実し、学生向けの植物病理学の参考書としてだけでなく、研究にもまた指導現場にも役立つ本としても広く活用されるのではないのでしょうか。

次号から学会ニュース編集委員会のメンバーを一部交代し、編集委員長を藤田佳克氏に引き継ぎます。従って、今号が最後の編集後記となります。新編集委員長、新編集委員会のお引き立てと学会ニュースの引き続きのご愛読のほど宜しくお願いいたします。長い間のお付き合いありがとうございました。
(高橋賢司)